

附日文解說

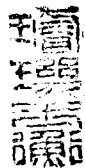
商家學
家庭

便
蒙
尺
牘

臺北明明公司版

(稟父)

◎寫信款式



(表)

新竹州新竹市黑金町三丁目二十番地

張建忠
父親大人膝下

(裏)

封

月
日

臺中州豐原郡豐原街豐原二一六番地

男

張正義正躬拜稟

(稟叔)

高雄市鹽埕町四丁目六番地

(表)

林相如 叔父大人 尊前



(裏)

封

月
日

臺南州虎尾郡虎尾街虎尾
姪 林 阿 生 拜稟

(寄姊)

(表)

臺中市梅枝町八丁目三十二番地

王 氏 秀 英 賢姊 粧 次

(裏)

緘

月 日

臺中州大甲郡清水街清水五一二

妹

王 氏 秀 春 檢 任

(寄友)

(表)

臺北市永樂町三丁目五番地

陳友仁仁兄雅鑒

(裏)

封

月
日

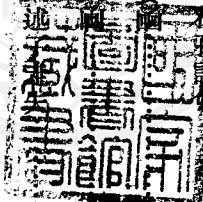
苗栗郡苗栗街苗栗二番地

弟
宋登財頓首

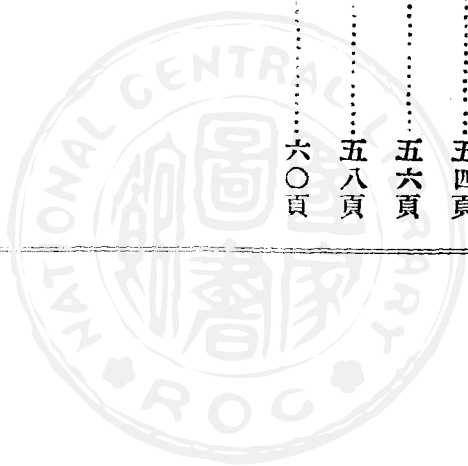
目錄

父在家規子	一頁
子在外稟復	五頁
子稟父函	九頁
父復子函	一一頁
子寄母稟	一三頁
母復子函	一五頁
母致子函	一七頁
子復母稟	一九頁
兄致弟囑囤貨	二一頁
弟復兄論囤貨	二四頁
叔致姪勸輯睦	二七頁

姪復叔勸學	二九頁
孫稟祖父母思慕	三一頁
祖父母稟孫勸勉	三三頁
夫致妻函	三六頁
妻復夫函	三八頁
妻致夫述	四一頁
託銷貨函	四三頁
復銷貨函	四五頁
致友述辦貨困難	四七頁
復友購貨不拘產地函	四九頁
託人代銷貨物啓	五〇頁



答允代銷貨物啓·····	五二頁
向親友告借啓·····	五四頁
復允借貸函·····	五六頁
向友借書啓·····	五八頁
復允借書函·····	六〇頁



語意

◎ 父在家規子

(父が家に居て他所に行つてゐる子を戒める)

倏經

(月日が早く過ぎたこと)

杳無

(全然無(な)いこと)

俱廢

(皆(みな)ほつて(な)ら(な)か(な)し(し)に(に)す(す)る(る)こ(こ)と(と))

發憤

(奮(ふる)發(はつ)す(す)る(る)こ(こ)と(と))

安逸

(安(やす)ん(ん)じ(じ)樂(らく)し(し)む(む)こ(こ)と(と))

付諸度外

(全然顧(顧)み(み)な(な)い(い)こ(こ)と(と))

星期

(日(に)曜(やう)日(に)の(の)こ(こ)と(と))

放浪

(ま(ま)さ(さ)よ(よ)ひ(ひ)歩(あ)く(く)こ(こ)と(と))

荒廢

(職(しやく)務(む)を(を)う(う)ち(ち)す(す)て(て)よ(よ)な(な)ほ(ほ)ざ(ざ)り(り)に(に)す(す)る(る)こ(こ)と(と))

恨絶

(う(う)ら(ら)め(め)しい(しい)限(か)り(り))

行爲不肖

(お(お)ろ(ろ)か(か)な(な)行(な)を(を)す(す)る(る))

素寒

(貧(ひん)乏(ぱく)で(で)あ(あ)る(る)こ(こ)と(と))

浪子

(放(はつ)浪(らう)の(の)子(こ)供(ども))

耶

(感(かん)嘆(たん)し(し)て(て)發(はつ)す(す)る(る)聲(こゑ)や(や))

目覩

(目(め)で(で)見(み)る(る)こ(こ)と(と))

不噪

(さ(さ)わ(わ)が(が)な(な)い(い)こ(こ)と(と))

前愆

(今(いま)ま(ま)での(の)あ(あ)や(や)ま(ま)ち(ち))

痛改

(大(だい)に(に)改(か)め(め)る(る)こ(こ)と(と))

力圖

(ま(ま)じ(じ)め(め)に(に)企(き)圖(と)す(す)る(る)こ(こ)と(と))

既往不

究

(既(い)に(に)過(か)ぎ(ぎ)た(た)こ(こ)と(と)は(は)究(きゆう)め(め)て(て)も(も)無(な)駄(だ)で(で)あ(あ)る(る))

悛改

(既(い)往(わう)の(の)罪(ざい)惡(あく)を(を)改(か)め(め)て(て)性(せい)行(ぎやう)を(を)か(か)へ(へ)る(る)こ(こ)と(と))

有玷

(お(お)と(と)す(す)る(る)こ(こ)と(と))

通解

吾兒知悉。

一筆吾が子に知せます。

國家圖書館



002566111

自汝離家之後。倏經三月有餘。至今杳無音信。何其如是之忙。寔屬不解。

近日聞得爾在學中。

百課俱廢。毫無發憤之志。只圖安逸退後。

讀書一項付諸度外。

每逢星期。遂約二二三同伴遊博放浪。

如此荒廢。令人恨絕。

お前が家を離れてから、早や三ヶ月餘りも立ちました

今になつても未だ便りがありませんが、一体そんなに忙しいのでせうか、誠に理が分りません。

最近聞く所に依ると、お前は學校に居て。

凡ての學科をほつてらかしにし、少しも發憤の志が無く、只安逸を貪り退歩あるばかりであります。

讀書の事は度外に付して一向かへりみません。

毎回の日曜日には、二三の友達と約束して一緒に遊びに行つたり、ばくちをやつたりしてゐるとの事。

かやうにだらしがなく自分の本務をなほざりにする様では、全く怨めしい限りであります。

父爲汝謀斯學者。幾若難於登天。

惟望吾兒蒸蒸日上。

豈知汝竟行爲不肖。並不思及家本素寒。又不念及已之終身。何我門之不幸。出此浪子耶。

雖爾行爲我未目覩。然雀不噪空巢。

爲此來字問爾。果有此行爲否。

倘實有所爲。即望速將前愆痛

父がお前を此の學校に入れる爲に奔走したのであるが、まるで天に登るが如く困難でありました。

此は全く吾が子が日に日に進歩して行くのを望むが爲であります。

どうしてお前がこんな不肖な行爲をすることを知りませうか。その上家が元より貧乏であることに思を致さないし、又自分の將來についても毫も考へてみません。何たる我が家の不幸でありませうか。此の放浪息子を出したことは……

お前の行爲を父は目のあたり見なかつたけれども、然し雀は決して空巢で噪くことはありません。

故に此の手紙をしたゝめてお前に尋ねるのです。果してかゝる行爲があつたかどうかを……

若し本當にかゝる行爲があれば、速に前非を大に改め

改。

悔艾自新。認真讀書。立志力
圖上進。

致於同窗學友。擇其善者從之。
不善者改之。

惟既往之不究。知來者之可追。
倘仍執迷不知悔改。則係自甘
居賤。

父決立將兒驅逐。以免有玷家
風也。

ることを望みます。

さうして大に反省して新しい方に向ひ、眞面目に勉強
し志を立てて上達を圖ることに努力すべきであります

さうして同窓の學友については、其の善い方を擇んで
之に従ひ、不善の者は斥けなければなりません。

既に過ぎた事は仕方がなく、來る者は此を捕へる事を
知るべきであります。

若しも迷ひから醒め切めらず、速に改めることを知らな
ければ、それこそ自ら賤に就くことを甘じてゐる理で
あります。

さうすれば父は決然と立つてお前を逐ひ出し、以て家
風の失墜から免れたいと思ひます。

見字之後。速速復音。是爲至要。

此問近好。

此の手紙を見たら早速返事を出すことが肝要です。
此を以て近況を尋ねます。

◎ 子在外稟復

(子が外出してゐて父母に申上げる返事)

語意

膝下

(親の膝の下にすがつて慕ふこと)

慈顔

(慈愛に充ちた顔のこと)

片刻

(暫くの間)

上課

(登校)

錦注

(御心に掛けること)

貪逸

(安逸を貪ること)

青樓

(女の居る酒樓)

嗜賭

(酒飲や賭博)

尋花

(女を捜し求めること)

敗德

(けがれた行)

謠傳

(うはさを傳へること)

捏造

(やたらに造ること)

無稽之言

(根據の無い話)

非遙

(遠く無い、もうすぐだ)

通解

母親大人膝下。

昨日接奉訓諭。莊誦之下。敬悉一切。

男自拜別慈顏。當即乘火車抵北。是日即訪保證人。略譚片刻。

而該月初十日入校。仍入高等頭班。

逐日除上課之外。餘則習練俄法文語。及珠算筆算代數等學。

父上母上へ申上げます。

昨日御訓戒の御手紙を頂き、丁寧に拜讀して、一切よく分りました。

私は御別れしてから、直に汽車に乗つて臺北に來ましたその日保証人を訪問し、暫くの間話をしました。

そしてその月の十日に入學し、優秀な部に入りました

毎日登校を除いた外は、暇があるとロシアやフランスの文語を練習し、又珠算、筆算、代數等を學びます。

前月考試。已蒙列入特等。現需各書。均經先月購備。不免錦注。

讀來諭謂男貪逸廢學。不圖上進。

又以每逢星期日遊狎青樓。邀人嗜賭等情。此言從何說起。

男自入校至今。足未出戶。至於星期男到報館談論。或往書館閱書却有之。

至於尋花嗜賭。男亦受有教育

前月の試験で、既に特等に入りました。現在使つてゐる書物は、既に先月皆買ひ求めましたから、御安心下さいませ。

御訓戒の御手紙に依りますと、自分は安逸を貪り、勉強をそつちのけにし、上達を顧みず。

又毎日曜日には酒樓等へ行つて遊び、人を誘つて酒を飲み、ばくちをする等、かやうな話は何處から起つたのでせうか？

自分は入學してから今迄、未だ勝手に外出したことは無く、日曜日に新聞社へ行つて話をしたり、或は本屋へ行つて本を讀んだりしたことだけはあります。

酒樓へ行つたり酒飲や賭博をしたりする事等は、自分

陶溶。豈肯作此敗德之事。

度此謠傳。其同窗中之某々捏造耶。

緣其日適校內考試。某兄爲不正行爲。男識破其非。

故此與男爲仇。捏造僞言。壞人名譽。

務祈大人體察細情。嫖賭二事豈男所爲者乎。

還求二大人勿聽無稽之言。是

「教育を受けた人間であるから、どうしてかかる敗徳の事をやれませうか。」

此の謠言を傳へたのは、同窓中の某々がやたらに造り上げたことでありませう。

それは或日丁度學校内で試験がありました。某兄はその際不正行爲をしたので、自分はそれを知つて其の非を警めたのです。

故に自分を仇となし、やたらに僞言を造り上げ、人の名譽を傷つけようとしてみます。

どうぞ父(母)上は此の事情をよくお察し下さい。女買ひと賭博の二事は、どうして自分がやれませうか。

どうぞ父上母上様は此のでたらめな言を御聽にならな

爲至幸。

一切細情。暑假非遙。男返家
時再行面稟。

專肅敬請金安。

◎ 子 稟 父 函

(子が父に上げる手紙)

語 意

庭 悱

(庭のとばりてつ
まり家のこと)

匝 月

(一ヶ月)

神 繞 膝 下

(精神が家へ馳せて親の
膝下を圍んで楽しむこと)

和 藹

(和氣藹々として
むつまじいこと)

上 班

(學校へ出
ること)

飭 人

(人を
使つて)

曠 課

(缺課の
こと)

至 盼

(しきりに
頼むこと)

い様にして下さい。これこそ私の最も幸とする所です

一切の詳しい事は、夏休も遠くないから、自分が歸つてから又申上げませう。

此を以て御伺ひ致します。

父親大人膝下。敬稟者。

叩別庭偉。已將匝月。

每於課餘之暇。默思教訓。未嘗不神繞膝下也。

校中諸教習先生。均循循善誘。舉動亦和藹可親。

惟男上班時。及溫習室所用書籍。尙少某某書數種。

務祈大人購齊。即飭人賜下。

父上に申上げます。

家を離れてから既に一ヶ月立ちました。

毎日勉強の暇には、靜かに教訓を思ひ出し、心が父上の身の周を離れたことはありません。

學校の先生方は、皆親切に良く導いて下され、舉動も亦和氣藹々として本當に親むべきであります。

只自分が登校した時、及自習室に用ひる書籍は、尙數種類足りません。

どうぞお買ひ下さつて、人に持たせて下さい。

俾得接讀。以免曠課。

是爲至盼。餘容續稟。專此祇

請金安。

さうして缺かきぎに勉強を續ける事が出来る様にした
と思ひます。

どうぞお願ひ致します。後の事は次の宛りに申上げる
ことを許して下さい。此を以てお伺ひ致します。

◎ 父復子函

(父が子に出す返事)

語意

入目

(御覽に入れること
見せること)

收条

(受領証)

道及

(言及すること)

條寒條熱

(寒くなつたり
暑くなつたりすること)

疎

處

(學校を疎かに
する心配)

日佳

(毎日元氣で
楽しいこと)

尊長夫子

(先生
のこと)

道候

(宜しく
云ふこと)

通解

祥兒入目。頃由郵局交來汝稟

折閱之餘。得悉吾兒需用某某書數種。

慈特至各書局購齊。今託某某信局帶交。

至日驗收後。即給收條爲要。

再察爾來稟之字。日漸退化。宜勤習爲是。

據傳聞云某某學堂。近來添備俄文法文。

此の手紙を祥兒(祥と云ふ子供)に見せます。今郵便局よりお前の手紙をもらひました。

よくよく見た結果、吾が子が〇〇の書數種欲しいと云ふ事が分りました。

各本店へ行つて買つて來ました。只今某局に託して持つて行きました。

着いたらよく調べて受取り、又受取つた通知書を添つて來て下さい。

更に考へて見ると、お前の手紙の字は、日に日に退歩してゐる様です。眞面目にけいこすべきであります。

聞く所に依れば、某の學校では、最近ロシア文、佛蘭西文等を増加してゐるとのこと。

未識爾學中曾有添否。便中道及。

現下天氣倏寒倏熱。早晚之間。須要自加珍重。

切勿貪涼。以致疎虞。至要至要。

此詢日佳。

諸尊長夫子前。代爲道候。不另

お前の學校では増加してゐるでせうか。返事の手紙中に此の事も入れて知せて下さい。

目下天氣が寒くなつたり熱くなつたりして不順であるから、朝晩、更に一層の自重を要します。

決して涼を貪り、以て學校を缺席する心配のない様になさう。至極大切な事です。

此を以て毎日の平安を祈ります。

諸先生の前で、父に代つて宜しく云つて下さい。別に手紙を差上げませんから……

◎ 子寄母稟

(子が母に差上げる手紙)

語意

表弟

（父母の姉妹の子供で、自分の弟に當る者）

慈諭

（情深いお諭）

臥室

（寢室）

慈念

（親の情深い心配）

劬志

（志を堅くして苦勞すること）

通解

母親大人膝下敬稟者。

頃某々表弟來。奉到慈諭。並

衣服五件。均敬拜領。

學堂臥室。均係洋房格式。天

氣寒暖。較家中合宜。足紓慈

念。

賜下之絲綿衣服。昨已換上。

母上様に申し上げます。

今某の従弟が來ました。さうしてお母様のお手紙と衣服五件持つて來ましたが、皆頂きました。

學校の寢室は皆西洋式で、天候の加減は、家に比較して却つて宜しいございます。母上の御心配を慰めるのに足ることと思ひます。

送つて下さつた綿の着物は、昨日着換へました。体が

身暖思恩。

惟有幼志勤學。冀圖上進。而報稱期盼於萬一也。

肅此叩請 金安。

暖くなつて親の恩の有難さを感じます。

只志を向くして苦勞して學を勵み、上達を圖り、以て恩の萬分の一に酬ひたいと思ひます。

此を以てお伺ひ申上げます。

語意

◎ 母復子函

(母が子に返す手紙)

幾兒

(何番目かの男)

人覽

(御覽に入る)

相伴

(件になつて呉れる)

不嫌

(いとほな)

寂寞

(淋しい)

用功

(勉強)

他望

(他に望をかけること)

不多囑

(多く言ふことは無い)

近佳

(最近益々氣嫌が良くなること)

某某幾兒入覽。

刻接來稟。知衣服均經收到。

並悉兒身甚安爲慰。

爾在外肯用心習學。我在家勤

苦。似亦不以爲勞。

況有爾弟妹等朝夕相伴。尤不

嫌寂寞。

爾能專心用功。學問有進步。

此即人子報親之道。

此の手紙を某の何男に御覽に入れます。

只今手紙に依り、衣服等は既に受取つたと云ふことを知り、尙身体も頗る元氣であることを知つて安心致しました。

お前が他所に居て専心學業に勵めば、母は家に居て苦勞して働いても、又苦しいとは思はないのです。

ましてや弟妹達が朝夕一緒に居て呉れるので、少しも淋しいとは思はないのです。

お前が専心勉強に勵めば、學問は必ず進歩します。此が即ち子として親の恩に報ずる道であります。

我安所他望哉。

體操爲體育第一要事。爾宜留心習練。不可曠班。

然亦須小心謹慎。不可過勞。凡事過則傷身。爾猶不可不慎也。

餘不多囑。卽問近佳。

母は此以外に望は無いのです。

體操は體育で一番大事であるから、宜しく心に留めて練習をし、決して席を缺いて怠けてはいけません。

然しやはりよくよく注意をし、慎しんで、過勞の無い様にせねばなりません。

凡ての事は度を過ぎると体を傷けるものであるから、お前はよくよく注意をしないと、いけません。

後はさう多く言ひ付けることはありません。どうか氣遣よく暮す様に祈ります。

◎ 母致子函

(母より子に上げる手紙)

語意

知悉(知つて 貰ふこと) 抵基隆(基隆に 着くこと) 了結(終りを告げる こと) 瀕行(出立する) 切囑(しきりに 頼むこと)

違忤(逆ふこと。言ふこと を聞かないこと) 不是(正しくない こと) 加意(特に意を 用ひること) 日好(日に日によくなる 挨拶用 応酬である。おれもいふ)

並詢(序にお伺ひする)

通解

某某二兒知悉。

予因汝兄之事。隨爾父出。刻

已於本月二十日抵基隆。

看來此事了結。總須兩月光

景。方可言旋。

此の手紙を次男の某に上げます。

母はあなたの兄の事でお父さんと一緒に出たのですが
もう既に本月二十日に基隆に着きました。

此の度の仕事を了了するには、二三ヶ月はかゝらうし
く、それ迄でなければ歸られませぬ。

我與爾父瀕行時。切囑爾叔嬪隨時教導。

爾須敬聽教訓。不可違忤。

爾弟妹如有不是之處。亦須加意照看也。

餘不多囑。便望復稟爲要。專此順問日好。並詢叔嬪大安。

◎ 子復母稟

(子が母に返す手紙)

母はお父さんと一緒に出發する時、切に叔父さんや叔母さんにお前達を教へ導くことを頼みました。

あなた方はよく教を聞いて、決してそわいてはなりません。

弟妹達が若し間違つたことをしたら、よく注意して世話をしなければなりません。

後は別に言ふことはありませんが、返事を出すことが大切です。

どうか御氣遣よく、序に叔父さんや叔母達の不安を祈ります。

語意

安抵

(無事に着いた)

忻慰

(嬉しくて安心が出来た)

殷勤

(親切丁寧)

無二

(二つでなく一様である)

遵諭

(教訓を守る)

珍攝

(御體御自愛のこと)

旅安

(旅路の平安)

通解

母親大人膝下頃奉訓諭。

敬悉大人已安抵基隆。忻慰

何極。

弟妹等近頗和好。並無違忤

慈訓之處。

お母様に申し上げます。只今御手紙を頂きました。

お母様が既に無事に基隆に着いたとのこと、嬉しくて安心が出来ました。

弟妹達は最近頗る仲良しで、少しも御教に背く様な事はして居ません。

叔嬢照看之慇懃。與吾父母毫無二致。男自當遵諭敬聽教導也。

大人在外新格再珍編。並求轉稟父親大人。

回途便道過臺北時。祈選購新學圖書數種。以便參讀也。

叩請旅安

叔父様や叔母様の親切は、お父さんやお母さんと少しも變るところなく、私は必ず其の教訓を守ります。

お母様は外出してゐられるから特に御體に御氣を付けになり、序に父上様に申上げて下さる様に願ひます。

臺道に臺北に寄る序がありましたら、どうぞ新學圖書數種を買つて下さい。それで以て參考にしたいと思います。

旅路の平安を祈ります。

◎ 兄致弟囑圖書

(兄が弟に商品を買ひ留めることを願む手紙)

語意

國貨(商品の買溜)

奔馳(あちこち駆け廻ること)

離亭之感(家を離れて淋しく感じることを。郷愁)

飛漲(はかに高くなること)

勢

必培増(必ず倍になる情勢)

不敷(不足すること)

悉心(心を盡す)

如見(丸で顔を見た様に懐しい)

通解

某某幾弟如見。

昨歲離家以來。因商事奔馳。

音書乏便。心甚歉如。

刻屆新秋。仰見雁陣行空。頗

增人離亭之感也。

近來本地。烟價飛漲。每擔約

某の何番目の弟にお知らせします。

昨年家を離れてから、商賣の爲にあちこち駆け廻つて
便りも十分に出来なく、誠に心苦しい次第であります

時は今秋の初で、空を飛ぶ雁が列を作つて行くのを見
た時、人をして郷愁の念を起させるものです。

近頃此の地では、煙草の値段が、益も高くなり、每擔

加到三四元。而存貨有限。

兄昨得某地密電云。前日彼處降霜。初生烟葉。其苗被此一擊。已無收穫之望。

此後葉價勢必培增。此非尋常之機會。

弟須速爲留意。見有貨出。莫被他人買去。

倘若資本不敷。可速修函告我。自當籌資。

老親在堂。務宜悉心侍奉。

に付約三四圓の増加で、しかも在庫品は少くて限りがあります。

兄は昨日東京からのないしよの電報を受けたがそれに依ると、先日彼の地に霜が降り、初めて出た煙草の若葉や、其の苗は一撃を受けて、既に收穫の見込がありません。

今後煙草の葉の値段は必ず倍加する情勢であり、全く案断を許しません。

あなたはよくよく注意をして、品物が出たら、人に買はれない様に買つて置きなさい。

若し資本が足らなかつたら、早速手紙を書いて知せて下さい、さうしたら資金を用意して置きます。

年寄の親が家に居るから、心を盡して孝養を致して下さい。

爾嫂及姪。全賴照拂。

弟與弟媳。及賢姪等。當知自重。以免兄客地懸念。

手此佈達。順敬請雙親大人近安。

兄嫁や姪は、御世話を頼みにしてゐます。

あなたや弟媳（弟の妻）や姪達は、體の自愛を頼みます。かうして旅の私に心配をさせないで下さい。

此を以て御知せします。序に両親様の御機嫌を祈ります。

語意

◎ 弟復兄論固貨

（弟が兄に商品の買溜に ついての返事した手紙）

台覽

（御覽に入れる）

敬聆

（皆承知した）

闔家

（家中）

風塵

（風や埃を浴びて 苦勞すること）

垂白

（白毛で あること）

杖履

（杖をついて歩くことで、 つまり身體の様子）

承歡之職

（父母に仕 へる務）

擬趁此時

（此の時を利用 しようと思つて）

匯款

（送金）

最靈(最も鋭敏で
あること)

示曉(知らせ
て下さい)

爲盼(願つて
あること)

弟眷(弟の
家族)

通解

某某長兄台覽。

昨誦來函。敬聆一切。

欣知兄客地平安。身體安好。

闔家歡慰。

如見奔走風塵。弟因學業未

成。徒以坐守家園。此心何能

自安。

所幸雙親垂白。杖履安康。

某の長兄に御手紙を御覽に入れます。

昨日御手紙を拜誦して一切のこと皆分りました。

兄さんが旅に居て御無事で、體も御元氣であることを知り、家中皆喜び安心致しました。

兄のやうに東奔西走して苦勞してゐるのに、私は學業が未だ終らないからといつて徒らに家の留守番をしてゐることは、どうして此の心がさまりませうか、本常に濟まなく思ひます。

幸に二人の親は髮の毛やひげこそ白いが體はまだ元氣であります。

長嫂亦能克盡承歡之職。

侄輩均在學堂讀書。亦甚平安。

至所云某地烟葉大傷。弟遵即往探果實。刻已收買二百擔。

今價已暴漲。弟擬趁此時再收買二百擔。

其價大約在某某元之間。未識吾兄之意爲何。

兄嫁さんはよく父母に仕へる道を盡してゐるし、

侄達は皆學校で勉強をし、體もまた元氣です。

云ふ所の某地の煙草葉の大損傷は、行つて調べた結果果して事實であつたので、既に二百擔買ひ上げました

今値段が油も高くなりますので、自分は此の機會に更に二百擔買ひ上げたいと思つてゐます。

其の値段は凡そ某某圓の間ですが、兄さんの御意見は如何でございませう。

若可行者。請匯款某百元。

想外間信息最靈。如何之處。

乞卽定奪示曉爲盼。

弟眷俱叨暢安。請勿遠念。

特此佈復。祇請客安。

若しも買つても良いなら、どうか金某百圓送つて下さい。

思ふに外界の消息は最も鋭敏で、直に知られるのですから、どうすれば良いかを、きつと知らせて下さい。お願ひします。

私(弟)の家族はお蔭で變りはないから、遠い所で御心配にならない様にして下さい。

此を以て御返事致します。さうして旅の平安を祈ります。

語意

◎叔致姪勸輯陸

(叔父が侄に見弟仲良くすべきことを教へる手紙)

輯陸 (仲良くすること)

稍鬆 (こゝでは真正が軽いと云ふこと)

承兄志 (兄の志を承けつくこと)

垂弟型 (弟に手本を示すこと)

雍

陸 (謙しくしてゐる)

返而求之 (反省して和睦を求めること)

近佳 (近頃の平安幸福を祈ること)

某々賢姪如見。

頃表姪到來。聞吾姪極肯用功。至以爲慰。

吾姪上有兄。下有弟。將來家庭之責任。似覺稍鬆。

然上有兄何以承兄志。下有弟何以垂弟型。繫讀書是賴。

爾叔既愧爲人兄。復愧爲人弟。不足效也。

某の姪に一筆お知せします。

今表姪(從弟の姪)が來た話に依りますと、姪達は極く眞面目に勉強してゐるとのこと、誠に安心し喜んでゐます。

あなたは、上に兄さんが居り、下に弟があります。將來の家庭に於ける責任は、あなたとしては至つて輕いわけです。

然し、上に兄が居る時は如何にして兄の心を心とすべきか、下に弟が居る時は如何にして弟に手本を示すべきかが大きな問題であつて、此を解決するには讀書に頼るのみであります。

叔父は人の兄としてもはづかしいし、又人の弟としてもはづかしいのです、私を手本とするに足りませんが

惟我二人與爾父。一生雍睦。
姪輩當聞之熟矣。

還祈賢姪返而求之。

率此布意。即問近佳。

只吾等二人はあなたのお父さんと、一生涯仲良くして
来た事は、あなた方姪連のよく知つてゐるところであ
ります。

どうかあなた、よく反省して兄弟仲良くして下さい。

此を以て御知せ致します。さうして最近の平安幸福を
祈ります。

語意

◎ 姪復叔勤學

(姪が叔父によく勉強する
ことを誓ふ返事)

尊前

(御前に差上
げること)

鈞諭

(御さとし
のこと)

拜誦

(拜見)

上進

(上達する
こと)

功名

(功績と名譽)

魯鈍

(才智の
にぶいこと)

頑滯

(愚な自分)

通解

叔父大人尊前。

昨奉鈞諭。拜誦之下。敬悉種切。

勉姪以讀書上進。感甚感甚。

所謂上進者。不以求功名勉

姪。而勉姪以救時勢。

足見叔父識見之高。勝人十

倍。

姪雖魯鈍。敢不仰副期望耶。

頑滯近幸託福平順。堪以慰

叔父さんに申し上げます。

昨日御諭の御手紙を頂き、拜見して一切よく分りました。

私によく勉強して進歩する様にと云ふことを勵まし、誠に感謝に堪えません。

云ふところの上進と云ふものは、功名を求めんに非ずして、時勢に侵れない人間になれと云つて私を勵まして下さつてゐます。

叔父さんの識見の高いこと、人に勝ること十倍であります。

自分は愚ではあるが、叔父さんの期待に副ふべく努力するつもりです。

自分は幸にお蔭様で元氣でゐますから、御心を慰める

綺注耳。

肅此稟復。敬請福安。並祝闔第均吉。

ことが出来ませう。

此を以て御返事と致します。謹んで御多幸を祈り、且御一同様の平安を祝ひます。

◎ 孫稟祖父母思慕

(孫が祖父母を慕ふ手紙)

語意

思慕 (思ひ慕ふ)

託庇 (お蔭様で)

繫念 (心に掛け)

上課 (登校)

力圖 (努力すること)

穎悟 (聰明で賢)

いこと

清晨 (朝の早い時)

臨摹 (手本を見てまね)

繞膝之歡 (膝を圍んで孝養を)

通解

祖父母大人膝下。敬稟者。

祖父母に申し上げます。

孫男自正月十八日進校後。身體託庇甚安。請勿繫念

循序上課。自當力圖日有顯悟。

致於體操現已練熟。惟柔軟兵式二項體操。甚爲難練。

習字一課。每日清晨必先寫大字數十。然後臨摹聖教序二頁。

孫逐日如是。庶幾不免致意。

自分は正月十八日入學してより、體はお蔭で元氣で
ゐますから、どうぞ御心に掛けないで下さい。

順調に毎日登校し、自ら奮發努力して日に日に賢くな
つて行く様であります。

體操の事は現によく練習して熟練してゐます。只柔軟
兵式の三種の體操は、出來なくて甚だ練習し苦いので
習字の學科については、毎日早朝必ず先に大字數十を
書き、それから後、聖教序を手本にして二頁まね寫し
ます。

孫の毎日の勉強は此の通りですから、御心配にならな
い様にお願ひします。

惟常離膝下。不能朝夕承繞
膝之歡。負罪實甚耳。

肅此叩請金安。並問諸長輩
均安。

只お膝もとを離れて、朝夕孝養を盡す事が出来ないの
を罪深く思ひます。

此を以て御機嫌を御伺ひ申上げ、並に目上の親類達の
平安を祈ります。

◎ 祖父母復孫諄勉

(祖父母が孫によく勉強する
ことを懇切に諭す返事)

語意

諄勉

(勉強すべきことを
懇切に諭すこと)

記念

(心に何時も
思つてゐること)

反哺之義

(鴉が小さい時に親から餌を食べさせてもら
つたが親が年取ると反對に自分から餌をや

る。つまり
孝養を盡すこと)

顯人頭地

(人の上に
立つこと)

豈不勝

(豈勝さないことがありませ
うかいや却つて勝つてゐる)

不隨班

(人に追ひ付
かないこと)

早日有成

(早く成功
すること)

含飴之樂

(飴を口にかんだ様な
楽しみで嬉し、こと)

某々幾孫入覽。

自爾入校之後。頗深記念。

刻接來書。知身體平安。喜慰何似。

來信以離予左右爲憾。足徵爾殷於反哺之義。予心甚喜。

第今日之讀書。正他日致用之地步。

能得日有進益。他年顯人頭地

某の何番目の孫に此の手紙を上げます。

あなたが入學してから、何時も心に深く掛けてゐます

只今手紙に接し、體が元氣であることを知つて、嬉しいこと此上にありません。

來た手紙に依ると、私の傍を離れたことを大に憾みとしてゐるが、此に依つてあなたは「鴉有反哺」の義に富んでゐる事が分ります。つまり孝行の心が深いことを立證することが出来ます。私は嬉しくて堪りません。

但し今日の勉強は、他日有用な地歩を占むる元になります。

若し日に日に進歩することが出来たら、後日の上になち、出世することが出来ます。

豈不勝今日之慰我繞膝耶。

據云體操一項。爾因體●難練

但須留心慢慢練習。不隨班何害。

然身體不可過勞。是爲要緊。

但願吾孫早日有成。則我二人

覺比含飴之樂。更爲欣喜也。

家中大小均安。勿必遠念。此

問近佳。

かうなれば、今日私の傍に居れぬから残念だといつて慰めて呉れるより、遙かに勝つてゐるではありませんか。

云ふところの體操の事は、あなたの體が未だ小さいから練習しにくいのです。

但し意を用ひてゆつくり練習をし、人に少し後れたからといつて何の差支へがありませんか。

けれども體を過勞させてはいけません。此が最も大切な事です。

願はくば吾が孫の早期成功されんことを、これ即ち私達二人の最も嬉しいところであります。

家中は皆元氣ですから、遠い所で御心配にならない様になさい。此を以て最近の平安を祈ります。

◎ 夫致妻函 (夫が妻にやる手紙)

語意

祖塋

(祖先父の墓のこと)

辦理

(計畫し仕事を進めること)

從豊

(大げさにやること 贅澤すること)

靡費

(亂費すること)

切囑

(切に頼んで置くこと)

と

節人

(人を使って)

東跑西走

(あちこちを駆けまはること)

意外之虞

(思ひがけない事故にぶつつかる虞のあること)

再敘

(その時に又話すこと)

通解

某某賢妻收悉。

月前寄回金子五百元。諒早收到爲念。

某の賢妻に御承知を願ひます。

前月お金五百圓を送つて歸りましたが、既に受取つたことでせう。

此銀作爲修理各祖塋之用。務
須略從儉省。

一切照舊章辦理。萬勿過事從
豐。

此事無非盡人子之道。以表誠
敬而已。

靡費何益。是所切囑。

長兒既入學堂。切勿令其時時
回家。

次兒在店。宜飭人常看。囑其
上心習學。

此のお金は各祖先の墓を修理するのに使ふもので、どうか成るだけ儉約して下さい。

一切元の様式通りに仕事を進めて、決して大げさにやつてはいけません。

此は決して人の子としての道を盡さないのである。只誠心や敬意を表すれば足りるのであります。

費用をやたらに使つて何の役に立ちませうか。切にお願ひ致します。

長男は既に入學して勉強してゐるから、決して時々歸省を命じてはなりません。

次男は店に居るから、宜しく人をして常に監督指導をせねばなりません。さうして専心業を習ふ様に言ひつけないさい。

三兒在家。宜不時看管。不准其東跑西走。免多意外之虞。

近日行中事務甚繁。擬於冬初回家一走再敘。

此致。即問冬安。

三男は家に居るので、宜しく何時も監督して、決してあちこちへ行かせてはいけません。さうして思ひがけない事故に出合ふ虞の無い様にしなさい。

最近商行の事務が甚だ忙しく、此の冬の初頃に一遍歸る豫定ですから、その時に又話しませう。

此を以て御知せします。さうして此の冬の平安を祈ります。

語意

◎ 妻復夫函

(妻が夫に返す手紙)

如面 (顔に會つた様です)

修葺 (墓の修理)

祀事 (祭祀のこと)

夫子 (夫のこと)

得意非常 (商賣が繁昌して大に金儲をして)

豊潔 (盛大にやること)

祭掃 (墓掃除)

如何阻之 (如何に止めるか止めにくい)

分内之事 (自分の引受くべき分で當然のこと)

とで
ある

計較

一々かんじやうし
て固くすること

開支薪水

俸給を始めて
呉れたこと

錦注

心に掛けて
心配すること

通解

夫君如面。頃接手書。敬悉一切。

前月寄來金子五百元。早經收着。收塋工料皆貴。雖格外儉省。合計已用去三百餘元。

致於辦理祀事。族中皆因夫子近年得意非常。享祀必須豐潔。今年祭掃。無不車轎。使人如

夫君に申上げます。今御手紙に依り一切の事がよく分りました。

先月金五百圓送つて下さいましたがもう既に領收致しました。

墓の修理の工賃は至つて高く、極力儉約したが、それでももう三百餘圓使つてしまひました。

祭祀の事に至つては、親族中皆、近來夫君の商賣は非常に景氣が良いから、もつと大げさに盛大にやるべしだと云ふのです。

今年の墓掃除は、車や轎に乗らない者は無く、如何に

何阻之。

但宗祀之事。即多費數元。亦是分内之事耳。

況且十年輪經一次。想人生不過百歲。所輪則幾次。請勿計較可也。

長兒在學聞過暑後。即提師範生云。大約學識可以長進。

次兒在店。刻下開支薪水。

惟三兒最愛東奔西跑。絕不安

しむ此を阻止することが出来ませうか。

但し祖先を祀る事はいくらか餘計に使つたのであるが此亦自分の負擔すべき分であつて、己を得ません。

まして十年に一廻しか廻つて來ない事です。想ふに人生は百歳を越す事は殆ど無く一生に數回も廻つて來ませんから、どうか固苦しくしないで、良い加減にして下さい。

長男は學校に居るが、開くところに依ると、師範生になつたと云ひます。多分學問が進歩した事と思ひます。

次男は店に居るが、只今では俸給も貰つてゐます。

只三男だけは、最もあちこちを駆け廻る事が大好きで

分片刻。如之奈何。

夫子下冬返里。最妙將其帶去。

侍在左右。不至有患矣。

其餘家下均好。望勿錦注。

此覆。即請旅安。

少しの時間でも安心が出来ません。どうして良いでせうか、甚だ困つてゐます。

夫は此の冬にお歸りになるが、最も良い方法は此の三男と一緒に連れて行くことです。

さうしてあなたの傍に置けば、心配する様な事にならないでせう。

家中は皆達者ですから、どうぞ御心配にならない様にして下さい。

此を以て廻返事迄に。旅の平安を祈ります。

◎ 妻致夫述子走失

(妻が夫に子供が行方不明になつたことを知らせる手紙)

語意

青疎(こらんに)
(入れること)

二句鐘時(二時の)
(こと)

玩耍(遊んで)
(ゐること)

水烟一吸(水きせるで)
(服すること)

找尋

搜す
(こと)

情迫(事情が差し迫)
(つたこと)

夫君青睞。敬啓者。

金林三兒。於本日二句鐘時尙
在門口玩耍。

未及水煙一汲。回首已經不見。
喊之許久。並至左舍右鄰找尋
竟毫無下落。

刻下着三人四出找尋。仍無着
落。

爲此情迫奉告。務祈夫子卽速

夫君に御手紙を差上げます。

三男金林は、今日の二時頃、家の前で遊んでいました
が、

煙草も未だ一服しない中に、振り返つて見るともう姿
が見えませんでした。

随分長く呼びましたし、又隣近所をも捜しましたが、
遂に手掛りがありませんでした。

目下三四人に四方八方を捜してもらつてゐるが、何ら
の目鼻も付きません。

事情かくの如く切迫したので報告申上げます。どうか

來家。以便設法尋訪。

至要至要。順問刻安。

速刻お歸りになつて捜査の方法を講じて下さいませ。

至急お願ひします。序に目下の平安を祈ります。

◎ 託 銷 貨 函

(商品の賣捌を頼む手紙)

語 意

念切

(しきりに思ふこと)

三秋

(三年間)

銷路

(賣行きのこと、品を捌くこと)

求售

(賣りたいこと)

減跌

(價が下落すること)

脱卸

(おろしてしまふこと)

鼎力

(力添へすること)

推銷

(賣捌を推進すること)

容面謝

(面會してから御禮を申上げ、ることを許して下さい)

謹

安

(商賣上の言葉で、商賣の發展金儲を祈る意味)

垂照

(世話の厚情をたれること)

不戢

(淺くないこと)

通 解

某々仁兄先生閣下。居分兩地
念切三秋。

逕啓者。弟去年所存棉花菜油
兩種。迄今尙乏銷路。

現下急於求售。適逢價目減跌。
刻弟自願照市價脫卸。

知寶號往來客商頗盛。祈代爲
鼎力推銷。

得有機會。尙希賜示。

一切容面謝可也。

某兄に申し上げます。お互別れてから、切に想ふこと既に三年立ちました。

茲に申上げたいことがあります。自分は昨年棉花と菜油の二種を溜めて置きましたが、今になつてもまだ賣れなくて困つてゐます。

現在至急賣つてしまひたいと思ひます。若し値段が下落すれば自分はいゝろよく市價の通りに卸してしまひます。

貴店には客商の往來が頗る盛んであるから、どうか力になつて賣捌を世話して下さい。様御願ひ致します。

其の機會を得ましたら、どうか御知らせ下さいませ。

一切のお禮はお會してから申上げますからそれまで許して下さい。

此懇。即請籌安。並惟垂照不
戢。

此を以てお願ひ致します。又商賣の發展を祈り、序に
深い情を以て世話をして下さることを感謝します。

◎ 復 銷 貨 函

(賣品の賣捌を頼まれた
ことに對する返事)

語 意

正擬

(丁度考へて
ある所だと云ふ意味)

奉候

(お伺ひ
する)

華翰

(他人の手紙に
對する敬稱)

先頒

(先に來た
こと)

漸漲

(少しづつ
値段が高)

くなる
こと)

來城

(城内に來
ること)

可居

(置いても
よいこと)

倍蓰之利

(前の倍の利益
と云ふこと)

通 解

某々仁兄先生閣下。

正擬修箋奉候。忽荷華翰先頒。

某の兄様(友人)

丁度手紙を差上げたいと思つてゐる時突然お手紙を頂
きました。

敬悉一切。

委銷之貨。棉花尙有銷路。

惜乎未有善價。恐兄不肯出售。

惟菜油有漸漲之勢。望兄駕即

來城一商。

然雖非奇貨。而目下正可居之

時矣。

弟深望閣下得倍蓰之利。

故隨時留心市價。並招尋受主也。

一切の事よく分りました

賣捌を頼まれた品ですが、棉花は販路があるけれども
惜しいかな、値段は未だ良くありません。貴殿は多分
賣りたくないと思ひます。

只菜種油は値段が少しづつ良くなつて行く情勢であり
ますから、どうか一度お出で下さつて相談致しませう
珍らしい品では無いけれども、今の所置いて居ても良
い時であります。

私は貴殿が倍の利益が得られる様深く望んでゐます。
それで始終市價に留意し、併せて買主を尋ね求めたい
と思つてゐます。

專此奉覆。順請台安。

諸君均此道候。

此を以て御返事迄にどうぞ御機嫌よう。

皆様に宜しく。

◎致友述辦貨困難

(友達に品物を買ひ求めにくい) 事を知せる手紙

語意

赴北 (臺北へ來ること)

此次之行 (此の度の旅行は)

懸殊 (大に懸けはなれてあること)

折買 (分けさせてもらふこと) 大商人から買ひ求めること

另託 (別に頼むこと)

誤兄 (貴殿を困らせること)

通解

某々仁兄台覽。

弟今日起程赴北。

某の兄様(友人)に此の手紙を御覽に入れます。

私は今日出發して臺北に來ました。

而委辦之各貨。皆出於某地。

而夏布出於某地。

必至出處方可價廉。貨亦必佳。

弟此次之行。與某地路途。大相懸殊。

若必見委。俟弟回來時。或向大行家拆買。

否則請另託便人。庶免誤兄之事也。

草此字告。即候來示。

買ひ求めを命ぜられた品物は、悉く〇〇の地に、又夏の布は〇〇の地に産するものでありますから。

その産地の土地に行けば價はきつと安く、品も又良いと思ひます。

私の此の度の旅行は、某地の路と、大分かけ離れてゐます。(隨つてその産地へ行つて買ふ事は出来ません)

若しも是非とも私に命ずるならば、私が歸る時に、或は大商行から買ひ求めても良いでせう。

若しも嫌ならば、別の人に頼んで下さい。さうでない
と貴殿を何時迄も待たせ計畫を誤らせる事になります

亂筆ですが此を以てお知せ致します。どうか御指示をお願ひ致します。

◎復友購貨不拘產地函

友達に品物は必しも産地で買はなくても良いと云ふ事を返事する手紙

語意

頃展

(只今廣げて讀んだ)

錦旋時

(お歸りになる時)

不敷

(不足すること)

代墊

(立替て貰ふこと)

面奉

(前で返すこと)

費神

(御心配をかけること御世話になること)

贖儀

(お禮や誠意を表す爲に差上げる金品のこと)

晒納

(笑つて受け取ること喜んで納めること)

通解

某々仁兄閣下。

頃展手示。拜悉種切。

託買之物。不過數百元而已。

某の兄様。(友人)

只今御手紙を拜讀致しまして一切の事悉く承知しました。

お頼みの品、僅か數百圓に過ぎません。

不必定購出處。唯求錦旋時隨
買帶回可也。

昨奉金子五百元。想己檢收。

若不敷請代墊。諸當面奉。

種々費神。附呈贖儀。伏乞晒納。

此復。並請旅安。

必ずしも産出の地で買はなくとも良いからどうかお歸
りになる時序に買つて持つて歸つて下さいませ。

昨日金五百圓お送り致しました。もうお受け取りにな
つた事でせう。

若しも足らなかつたら、濟みませんが先に立替へて下
さいませ。さうしてお會ひした時にお返し致します。

種々とお手敷を御掛けして濟みません。別封はほんの
志を表すものですからどうぞ喜んで御受け下さる様伏
してお願ひ致します。

此を以て御返事迄に。併せて旅の平安を祈ります。

◎ 託人代銷貨物啓

（人に品物を賣捌いて
もらふ事を頼む手紙）

語意

郷長

（自分の郷
里の先賢）

尊臨

（片上に手紙を
見てもらふこと）

花色單

（品物の名
を書いた紙）

圈出

（丸で記を
つけること）

分銷

（賣捌を
手傳ふ）

こと）
揀擇（選んでも
らふこと）

通解

某々郷長先生尊鑒。

敬啓者。姪由家郷運到各貨。

特開花色單一紙。尊處愛購何物。乞於單上圈出。

以便將貨送呈揀擇。

並望於令親友處。力爲分銷。

能蒙一時售出。俾便速回。則

某の先生（友人）に御覽に入れます。

謹んで申上げます。自分が家から運んで来た品物について、

特に目録一通を作り、貴殿の所で買ひたい品物について、その品名の上に丸を付けて頂きたうございます。

さうしたらその品物をお送り申上げて選んで頂く事に致します。

序に御親友の處へも極力賣捌をお願ひしたいと思ひます。

お蔭で一時に皆賣出す事が出来たら、早く家へ歸る事

路費可省矣。

一切費神。不勝感戴。手此敬

託。即請

金安。

が出来旅費も相當省けるのです。

お手数を掛けまして誠に感謝に堪えません。此を以て御依頼申上げ、尙商賈の發展を祈ります。

◎ 答允代銷貨物啓

(品物の賣捌について、手傳)を引受けたと云ふ返事

語意

手翰

(御手紙)

貨單

(商品の目録)

辱荷

(かたじけないと云ふこと)頼まれたこと

委售

(賣方を頼まれ)ること

太昂

(値も値段が高)

いこと

庶幾

(お願ひすること)

脱手

(手放しすること)

通解

某々郷臺先生電鑒。

日前奉到手翰。並貨單一紙。均經收悉。

辱荷委售各貨。合宜家用者。

大約十分之五。

而於舍親友處愛者亦多。故特先行報告。

見字即將各貨寄下一看。

惟價似覺太昂。未識能可減少一二否。

同郷の某先生(友人)に御覽に入れます。

前日御手紙と目錄を頂き、一切よく分りました。

商品の賣捌を頼まれましたが、私の方の用途に合ふものは凡そ十分の五です。

さうして親友の處で欲しいと云ふものも相當ありますから、特に此を以て先に報告致します。

手紙を御覽になつたら、どうぞその品を送つて来て見せて下さい。

只値段が亦も高すぎるから、二割位減額が出来ませうか。

庶幾易於脫手。

如必照原價。敝地店舖甚多。購

之亦易易也。

端此肅復。即詢客安。並請財

社百益。

どうぞ早く手放しをする様お願い致します。

若し原價の通りに賣るなら、此方では店が甚だ多
買ひ上げるにしても易々たるものです。

此を以て御返事迄に。さうして旅の平安を祈り、同時
に商賣の發展を祝ひます。

語意

◎ 向親友告借啓

(親友に金を借りる
ことを頼む手紙)

如親

(まるで顔を
見た様になつかしい)

所商

(相談した
ところの)

好音惠下

(良い知らせを
下さること)

度年

(年を越す
こと)

俟

(待つ
こと)

抵償

(借金返しに
當てること)

如再

(若し
更に)

田契

(田地所有證書)

放心

(心配しなくて
も良いこと)

年關在即

(年が迫
つて來

た
こと)

某々姪弟如親。

逕啓者。兄所商之事。引領望久。至今未見好音惠下。

兄專望此欸度年。

俟來春三月。亦有該兄之欸者

據云決可償清。

誓將此欸抵償。

如再不信。準擬將所存田契過

戶。一切請爲放念。

某の姪弟。

申上げます。私が以前御相談申上げた事で、既に待つこと久しいです。それなのに未だ息い知せを受けてゐませんが如何でせうか。

私は全く此の金で年を越す(年を迎へる)豫定です。

來年の三月になると、私の金が入つて來るのです。云ふところに依ると、必ず完全に返してもらへるといひます。

その時には必ず此の金でお返しする事を貴殿と固く約束して置きます。

若し又信ぜられないならば、私の方の田契を上げることに致しますから、一切御心配にならない様にして下さい。

茲因年關在即。祈速賜示乃禱。
尚此藉請年安。

もう年も迫つて来るので、どうか早速御知らせ下さいませ。
此を以てお願ひ致します。併せて良い年を迎へられる様に祈ります。

◎ 復允借貸函 (お金を貸しても良いこと) を知せる返事

語意

大札 (御手紙) 囑籌 (お金を整へることを命ずること) 把握 (とりにぎること) 奇緊 (甚だ窮屈であること) 起息 (利息) 本利

還清 (元金も利息もきれいに返すこと) 拖欠 (延引して返さないこと) 毋庸 (必要が無い) 駕速 (早くお出でに)

通解

某某姉丈青鑒。

頃展大札。敬悉一切。

某の姉嬢さんにこの手紙を御覽に入れます。

只今御手紙を頂き、一切よく承知しました。

前蒙囑籌之歟。本當年經報命。緣弟初無把握。且今年銀根奇緊。

該出之賒。概不容少。

該入之賒。不能應用。

現弟代爲向敝友處移來五百元。

言明二分起息。

期限開春三月底一准本利還清。

設有拖欠。向弟追還。

亦毋庸田契過戶也。

爲此字告。乞駕速顧弟處取去

可耳。

以前にお金を用意(お金を借りる)することを命ぜられました。最早くから御報告申上げなければならぬところです。ところが私は初めからその用意が無く、その上今年はお金が迎も窮屈になつて來てゐます。

店から出した金は決して少くなく、

店へ入つて來た金は、自由に他に使用が出来ない状態になつてしまひました。

それで只今私は友達のところから五百圓都合を付けて來ました。年に二分の利子を付けると云ひます。

期限は來年の春三月迄で、その時には元金も利子も共にきれいに返さねばならぬことになつてゐます。

若しも長びいてその時に返さなければ、私に返済方を催促することです。

さうして田契を抵當にして渡す必要は無いと云ひます

此を以て御知せ致します。どうぞ直に私のところへ取りにお出下さい。

此復。即請年祉。

此を以て御返事迄に。併せて良い年を迎へられる様お祈り致します。

◎ 向友借書啓 (友達に向つて書物) を借りる手紙

語意

忝叨

(かたじけなふこと 好意を受けてゐること)

浮文

(挨拶用語のこと 俗に云ふ套語のこと)

不敘

(述べないこと)

不揣

(はからないこと つまり考へないこと)

胃味

(事理にくらいこと)

商假

(借りることを御相談申上げる)

惠允

(宜しいと許すこと)

揀出

(選出すこと)

原局

(元の郵便局のこと)

爲荷

お願ひする

歸趙

(お返しすること)

勿却

(断らないこと)

奉商

(御相談申上げる)

文祉

(讀書人に對して使ふことば) (で御機嫌ようと同じ)

通解

某某仁兄雅覽。

忝叨至好。浮文不敘。

某の兄様に御覽に入れます。

今迄大變よくつき合つてゐる仲良しであるから、形式ばつた挨拶用語を用ひないことに致します。

茲懇者。

刻弟因研究數學代數各學科。需用高等(代數)(數學)(幾何學)(並瀛寰全志)(瀛寰志略正續集)等書數種。

素稔尊處圖書齊備。

不揣冒昧。用敢商假一用。

如蒙惠允。祈即揀出。仍交原

局擲下爲荷。

俟弟用畢。卽當歸趙。

斷不致墨污損壞。還祈勿却是幸。

專此奉商。順請文祉。

茲にお願ひしたい事があります。

私は今數學、代數の各科を研究しようとしてゐるので高等(代數)(數學)(幾何學)(瀛寰全志)(瀛寰志略正續)等の數種の書物が入用です。

前前から貴殿のところでは圖書がよく整つてゐることを承知してゐるので、

自分が物事に暗い事も辨へず、

暫く拜借することを敢へて御相談申上げる次第であります。若しも御承諾になるならば、どうか選び出して何時も頼んでゐる郵便局を通して送つて下さいませ。

自分が使用済になりましたら、直にお返し致します。決して墨で汚したり、破損したりすることはしません。もし斷らないで承諾して下さいたら幸の至りでありませす。

特に此を以て御相談申上げ併せて御機嫌ようお祈り致します。

◎復允借書函(書物を貸す事を承諾する返事)

語意

同學(同窓生)

吝嗇(けちけちすること)

擲還(送り返すこと)

卽候(お伺ひする)

通解

某々仁兄同學青覽。

頃接手示。知需用各數學教科。

及瀛寰志略正續集。瀛寰新志

等書。

惟照來單。其中尙有某々一書

弟處寔未置備。非敢吝嗇。

某の窓兄に御覽に入れます。

只今お手紙を頂き、貴殿が各數學教科、及び瀛寰志略正續集、瀛寰新志等の書物が入用であることを知りました。

只送つて下さつた目録を見ると、其の中に尙〇〇の書が一冊、未だ買つてありません。私のところ無いのです。決してけちけちしてお貸し申げるのをしぶつてゐるではありません。

至於數學・代數・瀛寰新志數種。仍由全順局寄奉。至日檢收。

此書現弟並不需用。儘可暫存尊處。不必急於擲還也。此復。即候近佳。

それから數學・代數・瀛寰新志の數種は、只今全順局を通してお送り致しましたから、着いたらお調べして受取つて下さい。

此等の書は現に私は使用してゐないから、その儘暫く貴殿のところに置いても宜しうございます。決して急いで送還する必要はありません。

此を以て御返事迄に。最近の御機嫌をお伺ひします。